

研究報告

すり足に関する研究（第一報）：生成を水田農耕に観る
A Study on the SURIASHI / SHUFFLING in Consideration of
Its Generating with Relation to Japanese Rice Field Farming

井下 英樹
Hideki Ishita

Abstract

The purpose of this study is to clarify the generating processes of SURIASHI/SHUFFLING that is observed through precedent studies on the embodied functioning with relation to Japanese rice field farming. In this study, the cultural and historical consideration for the SURIASHI has been cast on its root causes aiming at the problems of standing work culture in the view of semantics on bipedal locomotion. As a result, it was made clear that the SURIASHI had been generated by its characteristic embodied functioning and its HABITUS with relation to the rice field farming. In addition, it can be said that the characteristics of SURIASHI has made the embodied culture and spiritual culture coincide with the basis of traditional Japanese culture throughout generations.

キーワード 二足ロコモーション・からだ働き・立ち働き性文化・ハビトゥス
bipedal locomotion・embodied functioning・standing work culture・
HABITUS

I はじめに

時代劇で着物姿の女性が廊下を滑るように歩むシーンをしばしば観る。こうした歩き方は一見非合理的に思える。なぜなら当該動作は既に現代の日常生活の中に存在していない。真似して歩いてみればたいていのはぎこちない動作と感ずることであろう。それほど現代人からかけ離れた動作である。われわれにとって習慣にないことは理解することや伝達することも至難である。前出の例示動作は舞踊をはじめとする芸能や武芸などに残っているのだが特別に嗜まない限り経験することもない。現代人は手を大

きく振って歩いている。このストライド方式歩行が一般的であって合理的な歩行動作であるとも思える。しかし、かつての前述のような動作が現在もわずかながら伝承文化の中に残っているということは、何かの存在理由があつてのことと仮定することができる。

「すり足」という言葉がある。前述の動作もこの言葉で示し得る。また相撲にも「すり足」と呼ばれる動きがある。こちらは腰を深く落としてやはり地面を摺るように前進する動作である。このように地面を滑るようなあるいは摺るような歩法を形成させたのは何なのか。本研究

者自身も「武術修行」の実践経験をとおして、足捌き、運足、歩法などにおける「すり足」動作が重要な位置を占めていることを実感させられている。本研究の着想はこうした私的な経験から得られたものである。

前述のような特有の動作は日本の特定時代の日常生活において「いま・ここ」の只中で実践されていた。その生成や変容の経緯を観ていくことは、我々日本人がどのように「人間や事象や社会や環境」へ関わって形成されてきたのか、その「かかわり」の問題を検討するための1つの側面を知る契機になると考えている。

遡れば「二足ロコモーション」（諸種の二足移動）という基本的な行動様式が人類誕生以来その都度の進化過程で大いに相関的に働いたことは想像に難くない。400万年間にもわたる二足ロコモーションの人類史的過程において「すり足」の生成もまた過程の中の特異な生活的文化的断面であると仮定すればその経緯を研究する意義があるだろう。その過程には人間が「生身のからだ」で生きてきた文化的歴史的足跡が必然的に内在していると考えられるのである。

II 研究目的

『古事記』以前の日本は書物のない時代である。「すり足」の生成を辿る時、そこには手がかりの希薄さが予測される。まずは関連する「先行文献」の知見を借りて考察する。

そしてブルデューが唱える「ハビトゥス」（1980・1990）の概念では、習慣が個人に齎す心身への影響を観ることができる。ハビトゥス概念に照らし合わせて「すり足」の生成を明らかにすることができると考えている。

およそ1万年前に日本列島は大陸から離れた。大陸と比べて国土が狭く土地の高低差がある。日本列島は温暖な気候で緑豊かな風土である。原日本人は、狩猟採集から稲作へと生活形態を転換させる中、原始的の信仰を享受し生活してきたと思われる。そのような環境で人間はどのような生活形態を成したのだろうか。「すり足」の生成に関する諸要因もその間の生活実態において検討できるのではないかと推察してい

る。

本研究は第一報である。そこで今回は「日本の水田農耕」に視座をおいて検討を行う。本研究者は、この第一報の成果を足場として、身体文化の要因としての「すり足」に関する文化的思想的研究の探求を向後の目的としている。

III 研究方法

本研究は下記の「(1)～(4)」にわたる検討をとおして、それぞれから得られる知見を、個別的にまた相互関連的に考察する方法を進める。

(1) 東西文化と「からだ働き性」の問題の検討：東西文化の形成過程における「二足ロコモーションの意味論」に関する伴の知見（2000・2009）を援用する。

(2) 「すり足」に関する先行研究の検討：日本の水田農耕における「すり足」の生成問題について、武智（1985）や蘆原（1986）などの先行文献を参考にしながら、検討と考察をする。

(3) 「すり足」の生成要因の検討：「すり足」の生成に関わる諸要因について上記の先行文献に準じて検討する。「田」や「土」や「履物」や「信仰」などとの関係における文化性や精神性や思想性の問題も考察する。

(4) ハビトゥス概念の適用における検討：水田農耕に「すり足」の生成の始原があることを、ブルデューのハビトゥスの概念を援用することによって、社会科学的に明らかにする。文献的研究による究明不足をハビトゥス概念に照らし合わせることによってその妥当性を確認したいと考える所以である。

IV 本研究の間う「すり足」の定義

本研究の間う「すり足」の定義を先に提示しておきたい。まず本研究では単に足裏を意図的かつ無意識に摺って歩く行為を「すり足」と称するものでない。本研究では文化的実践や生活実践における意識の有無に限らずそのような動作を取らざるを得ない行為そのものを「すり足」と考える。文化的な「すり足」の生成背景にはおそらく長大な時間におよぶ習性が何世代にも

わたって影響しているはずである。生活に密着して生成される「すり足」は特定の社会構造の文化の中で他律的に育まれるものと考えられる。

ところで単なる「すり足」は例えば現代的なシャッフルダンスにおける「ムーンウォーク」などの技法においても観ることができる。だがそのような身体表現上の動作は本研究の対象とする「すり足」として取り扱わない。なぜならば、創作ダンスなどの身体表現における意図的な「すり足」は芸術的に考案されたものであって、例えば伝承的な日本舞踊や古来の水田農耕に観られる「すり足」の文化的定着過程とは意味を異にすると考えるからである。

また水田農耕は日本周辺のアジアにも分布しており日本固有のものとは限らない。そこで今回の本研究では日本の水田農耕における「すり足」の生成問題に限定して検討する。

V 検討と考察：「すり足」の生成について

本章ではまず先行文献の検討を行う。次いで「すり足」の生成に関わる諸要因について検討したい。加えてハビトゥス概念などをもとに「すり足」の生成原理を論じる。以下に「1」から「4」にわたって検討を進める。

1. 東西文化と「からだ働き性」の問題

「すり足」は歩行の一形態に含まれる。従って暗闇や滑りやすい場所などの特殊な環境では用心のためにも万国共通でいかなる場合にも誰もが「すり足」で歩く。それではなぜ日本の伝承的な芸能や武芸においてその「すり足」がそれぞれの身体文化の構成要素として重要な意味論的側面を担っているのだろうか。

西洋文化の代表的なクラシックバレエでは躍動的に跳び撥ね回転して踊る。しかし日本舞踊では跳んだり跳ねたり回転したりしない。のみならず「すり足」が運足の基本となっている。同じ「踊り」なのになぜなのか。さらに例えば李(1982・p.60)の指摘するように「同じアジアの中国や韓国」の踊りも跳ねたりする律動や旋回が特徴となっている。なぜなのか。こうした疑問に答えてくれる論考がある。

伴(2000)は、人類の出立を400万年前の二足ロコモーション生活者への転身に見定めたいうで、狩猟活動に生活基盤をおいてきた労働形態を「走り働き性文化」とであると定義する。

…(走り働き性文化は)生活基盤とするところの「からだ働き性」において「走行」を決定的な要因としてその「走行」に多くを依存してきた二足ロコモーションの生活形態(に発生する)。典型例としては行動範囲の広い狩猟活動がある。(伴・2009・p.20)

この走り働き性文化は文化享受者の思想形成をも促す。伴は走り働き性文化の思想形成基盤を「主客対立型競争原理」に依拠していると見做す。さらにこの知性原理主導の走り働き性文化が人類共通の「原文化」とであると定義する。

一方でおよそ「1万年前」に追走するマンモスが絶滅してしまい、定住文化、農耕文化、語族の分化が始まる。同時にこの定住文化によって原文化の枝分かれが生じる。伴は、原文化の枝分かれ問題に留意して、1万年前の地球温暖化現象のために大陸から分断してしまう「日本列島の自然状況」に着目する。孤島化した日本列島には走り働き性文化を維持できる十分な「獲物」も存在せず「開拓すべき平野」も少ない。

…(立ち働き性文化は)生活基盤とするところの「からだ働き性」において、「立位・歩行」を決定的な要因として、その「立位・歩行」に多くを依存してきた二足ロコモーション生活者の労働形態(に発生する)。典型例としては行動範囲の狭い農耕活動がある。(伴・2009・pp.42-43)

行動範囲の狭い農耕活動はやがて本研究の間う水田農耕文化という独特を土着させてしまう。ところで「走る」は二足ロコモーション過程において両足が地面から離れる局面をもち「重力打破性」を意味している。他方で「歩く」は二足ロコモーション過程において一方の足が必ず地面を踏み締めている局面をもち「重力親和性」を意味し、またその場に「立つ」は「重力同調性」を意味する。こうした意味論を踏まえて伴はこの立ち働き性文化の思想形成基盤を「主客未分型共生原理」に依拠しているという。

こうして「二足ロコモーションの意味論」は、走り働き性文化における「重力打破性」と立ち働き性文化における「重力同調性」とに観られるように、180度の両極をなす「からだ働き性の異同問題」を基層に据えて様々に変容する。

本研究もまた立ち働き性文化としての水田農耕の問題を点検評価するのであるから、この「伴理論」を無視することはできない。先に指摘した「西洋バレエ」と「日本舞踊」との比較文化論においてそれぞれの踊りの特徴として重力との関係性における「180度」の異同を観てきた。この異同は二足ロコモーション生活者の生活過程における「走り働き性」と「立ち働き性」という基盤的な生活習慣の相違によって生成されてきたものである。生活文化は生活思想を生む。本研究は、この哲理を基軸にして、日本の伝身的身体文化に共通的に内在されている「すり足」の問題について考究している。そこで本研究ではその生成過程における文化的思想的な意味論上の背景を見逃してはならないと考えている。

2. 「すり足」に関する先行研究

武智は、『舞踊の芸』（1985）において「水田稲作農耕の労働の場における農民の身体行動は、その生産性において、舞踊を含めてあらゆる文化現象の基因となるものである」（pp.145 - 146・傍点引用者）として、舞の生成を水田農耕に求めている。舞は歩行の芸術であると言われる。「運歩」と呼ばれるその動きは、例えば西洋式ダンスのように飛んだり跳ねたりせずに、地を摺るように移行させていく、いわゆる「摺り足」であるという。

武智は舞を根幹として能や歌舞伎などにも言及し、舞の発生のルーツを民族や労働などの観点から論じている。三浦は『身体の零度』（1994）においてほぼそのまま武智の「すり足観」を援用している。また河野も「舞踏・武術・宗教儀礼」（野村／市川編『技術としての身体』所収・1999）において、やはり武智の考えを踏襲していると観てよい。

このような武智の「すり足観」に対して、蘆

原（1986）は、元禄時代つまり1700年前後に、舞台という滑らかな床と白足袋という床滑りのよい「履物」の影響を経由して、「能」における「すり足」が舞台芸術上の身体表現法として創造されたと考える。蘆原が説明する。

…世阿弥の頃は舞台の上に釘が落ちていたり、毛氈のようなものさえ敷いていた（申学談義）。とても擦り足など思いもよらないはずである。…やはりこれは江戸中期においてすべてが確立した時代、舞台の板も立派になって滑れるようになって生まれたものに違いない。（同前・pp.293-294）

この見解は武智の考えとまったく意を反している。しかし蘆原の見解にある「床と白足袋と接する足裏の関係性」は1つの示唆を与えてくれる。古代生活において足裏が接触したのは、現代のように、人間に都合のよい平らな歩きやすい接面、例えばアスファルトや大理石のように整った接面だけとは限らない。剥き出しの大地は、デコボコの悪路もあれば、高低差のある坂道であったり、足が地面に埋まるような柔らかい接面であったりする。接面と足裏との関係性が、ある特有の歩法（例えば「すり足」）を促すということは十分に想定できる。

蘆原は、江戸中期に「能のすり足」が考案されたと説明しているのだが、「多分これ（すり足）も所作舞台発明以前からあって、それが所作舞台の発明を促したのであるだろうが、それ以前においてはおそらく舞台機構の方がこの重要な足の運び方を創造させたのではあるまいか」（同前・p.293）と推察する。ここに蘆原のいう「舞台機構」とは、能舞台のみの「それ」でなく、原始の「すり足」を生成させしめた自然環境のことでもあって、すなわち「それ」とは剥き出しの大地や泥沼のような水田でもあった。蘆原の指摘するところは、芸能の中で「様式美」として完成される以前に、「からだ働き性」の「何か」を習慣化させて「すり足」というものが生成されたという示唆である。この経緯は、生成的時間差を始原の「すり足」として観るか、それとも芸術的に完成された段階での「すり足」と観るのか、見方の差異であると考えられる。

広義に捉えるならば、舞台機構とは、この際「すり足」の生成における全ての関係要因を意味している。それは生活世界『「ひと・もの・こと」との相互関係機構』におけるあらゆる局面、例えば接面や足裏の触覚、大地や生活世界に対する意識、習慣、労働形態、さては時代精神をも背景とする文化現象などまでそれら全てが身体文化に観られる「すり足」の生成に関与していると考えてよからう。従って武智が水田農耕に「すり足」の生成を観るのは妥当な見解といえる。何故ならば水田農耕現場という舞台機構にはおよそ想定できる「すり足」の生成要因を促進するすべてが備わっているからである。

次に水田農耕と「すり足」の生成要因との関係問題を具体的に検証する。

3. 「すり足」の生成要因

本節では、水田農耕における「すり足」の生成に関する諸要因を探るため、以下に「3-1」から「3-4」にわたって検討を進める。

3-1. 「稲作」について

稲作中心の農耕社会は稲や粟やキビといった穀物の栽培が補助的な生業からやがて主生業へと変化して始まる。そして社会集団をつくる。

…農耕社会の発展は単なる生業における栽培食物への依存度の高まりということだけではなく、それを成り立たせるための社会集団の組織化の歴史でもあった。(宮本・2009・p.41)。

日本における農耕の起源の見方については園耕と呼ばれる初期農耕の前段階を縄文農耕に置き換える考え方が増えているという(同前・p.202)。しかしこの段階ではまだ狩猟採集を主としていて「米」は補助的な食糧生産であった。朝鮮半島における穀物栽培の組織的生産技術は、成熟した後に、半島と近い九州への渡来民の移動によって齎され、縄文人との交流の中で生まれ、水田稲作の弥生文化を成立させる契機になる(同前)。小林(2007)は弥生時代を次のように定義して自説を述べている。

…弥生文化・弥生化したという目安は、基本的に「既による水田稲作」の開始があるかないかで判断することとし、縄文時代後半頃から想定される小規模な陸地での稲作、すなわち陸稲栽培は弥生化の目安には含めない。(小林/広瀬編・2007・p.137)

縄文期における農耕はなかでも稲などの穀物栽培は規模の多少はあれその後半期から行われてきた。やがて九州から組織的に灌漑による水田稲作が各地に広まっている。それも急激な弥生時代へのシフトではなく徐々に移行している。弥生時代の始まりについては今後も議論の余地はある。しかし現在では以上が大勢的な水田農耕定着の流れとして考えられている(同前)。

こうして立ち働き性の水田農耕が日本列島における主要な生活構造となる。結果的に、日本列島分断以前の狩猟採集活動を主たる労働形態とした原走り働き性の生活構造と比較すれば、「からだ働き」の意味生成過程が構造変化に応じて変容する。やがて「すり足」が水田農耕における二足ロコモーションの意味論の変容を加速させて「立ち働き性文化」へと転換するのであるから、その経緯を、次に「田」と「土」という舞台機構との相互関係において観察する。

3-2. 「田と土」について

水田の「土」の性質は水に影響を受ける。水不足であれば灌漑をして多すぎれば排水する。こうして人為的に適切な「田」へと改良され、その繰り返し作業が「根気という精神性」を育む。排水後の「土」でも軟らかくヌルヌルする。水加減によっては硬くも軟らかくもなる。このような「土」が日本の「田の土」である(藤原・1991・p.99)。いわば「土」が主客未分の舞台機構となって人間を造るのである。

当然のことに、このような足をとられやすい水田作業では、すなわち狭隘な区画からなる「田」や「土」という舞台機構では、「からだ働きの運動性」(伴・2000)が特徴を帯びてくる。一定の限定空間で収穫の「質と量」を高めるためには「回帰反復型定常円環運動性」の長時間

労働を習慣化させてしまう（同前）。そして特有のからだ働き性をともなう水田農耕においては、立ち働き性文化の生成過程という歴史的経緯のもとに、特色ある「二足ロコモーションの形態」と「その意味論」の変容が始まるのである。

…まず両者の働く場所は「一定の限定空間」と「不特定の無限定空間」。次いで両者の運動性（からだ働き性）は「定常円環運動性」と「不定直線運動性」。いずれも対極的に異なる。一定の限定空間とは「狭隘な水田における稲作農法の立ち働き性閉鎖系労働」を想定すればわかりやすい。定常円環運動性とはその狭隘な水田における「繰り返し反復労働」を想定すればわかりやすい。不特定の無限定空間とは「広大なサバンナにおける狩猟活動の原走り働き性開放系労働」を想定すればわかりやすい。不定直線運動性とはその広大なサバンナにおける「獲物を仕留めるまでの追走労働」を想定すればわかりやすい。（伴・2009・p.45）

伴指摘の「前者」とは立ち働き性文化の特性であってすなわち本研究の間う水田農耕文化の労働特性である。また「後者」とは走り働き性文化の労働特性である。両者における対照点がすべて「180度の対極的位相関係」にあることに注意したい。ここに東西文化の生活思想的基層構造が「立ち働き性直観主導型共生原理」（1万年前に始まる）と「走り働き性知性主導型競争原理」（西洋世界では399万年後も合理主義へ変容して継続）とに枝分かれする原点がある。本研究はこの経緯を課題としている。このように水田農耕という立ち働き性文化の歴史的経緯に「すり足」の生成要因が「からだ働き」とともに息衝いてきたことは、モースやブルデューの指摘を待つまでもなく、現代の水田農耕からも容易に推察できるのである。

3-3. 「履物」について

履物は、足裏と地面との接着関係において、「すり足」の生成要因の1つであると考えられる。履物の考察に関して潮田の研究（1973）に

注目する。まずその起源は足の保護が重視されたことに端を発している。太古の生活では裸足であったと思われるが、歴史時代に入ってから素足歩行は多く、履物は特殊な上級階級にのみ許されたにすぎない。稲作農耕時代において主として草鞋が作られたのも稲作に依存し藁を利用するという生活形態であったことから頷ける。潮田は原始農耕における履物の研究で作業の主要道具となっている「田下駄」について詳細に報告している。

田下駄とは深田での代掻きや稲刈りにおいて足がもぐりこまないように、水田での「からだ働き」時に用いる履物の総称である。地域や時代によって形は様々である。基本的には「面積の広い板」を足裏に固定して使用する。「オオアシ」と呼ばれる田下駄は、その昔の子供の遊びにおける缶で作った「缶下駄」のように、履物に紐をつけて手で操って使用する。オオアシの目的は土を細かく砕いて平らにする作業に使われた。田面を踏みつけて「すり足」のように引きずるように地均したのである。労働としては厳しいものであると報告されている。

田下駄には「ナンバ」と呼ばれるものもあるらしい。しかしながら潮田は解釈を異にして「ナンバの語源」を次のように説明している。

…ナンバの語源については南蛮渡来だとか難場の下駄とか牽強附会するよりも、むしろ田植のあとに残ったナーバ（苗を束ねる藁）を田の隅に立ててナーバ流しすること…、稲苗をナーバ、ナエバ、ネバと各地でよぶごとくナンバは稲作で最も重要な苗であり、それを植える深田を神聖視する点や豊作を祈る気持ちの表れなどからみて、ナンバが苗（場）と考える方が当たっているだろう。（同前・p.60）

ナンバ歩きやナンバ走りが2009年の現在では身体技法の一環としてスポーツ界などで注目を集めている（木寺・2004）。ナンバ歩きとは同側の手足が同時に動く二足ロコモーションの形態であるが、明治時代以前の日本人はそのナンバ歩行を常足としていたといわれている。

さてナンバ歩きの語源には諸説があるので

が、本研究では潮田の指摘する「ナンバ」（苗場）で田下駄を使用する時の歩行動作を支持したい。興味深いのは福島県郡山郡湖南町に伝承されている田下駄の操作である。杖をつきながら体の安定を保って片足を下ろして一方の田下駄に体重をかけて二回ほど力を入れて土の塊を踏みつけ、別の足の田下駄の外側を田面から60センチほど上げて踏んでいく。その行為はちょうど相撲の四股踏みの格好になる（同前・p.59）。さらに下駄型の田下駄すなわち歯がある田下駄は主に芦などの草刈り時に切り株から足を保護するために使用された。そして前述のような板型の田下駄は代踏みや肥料踏みや深田での作業で足をとられないようにするために使用された。特に水田（ナンバ）での田下駄の使用は、一方を「田の土」に体重を預けるために、他方をもぐりこませないように「アメンボ」のように操作したのである。この一連の動作を裸足で行えばそのまま「すり足」に直結する。そして平安時代以降になって路上で履く「下駄」が生まれたといわれている（同前・p.88）。

水田農耕用の履物を観ることによってその当時の「ナンバ」における「田下駄」の使用法から具体的な労働形態も垣間見ることができる。この経緯に「すり足」の生成要因があることは十分に想定できる。習慣化されたナンバ動作もまた「すり足」の生成に少なからず影響を与えているのだろう。そして「ナンバ動作」と「すり足」は水田農耕において不可避である「立ち働き性からだ働き」のそれぞれの側面を相互連関的に象徴しているのかもしれない。

ここに言及した「立ち働き性」の水田労働と、人類出立以来の「走り働き性」の狩猟労働とを比較するとき、人間の「生き方の問題」としても、例えば宗教的信仰心の生成に関する影響についても、「からだ働き」のあり方に因って異なるの生じることが十分に想定できる。次に「水田と原始信仰」の関係について検討する。

3-4. 「水田と原始信仰」について

護国豊穰を願って祀りが行われる風習は日本各地にまだ点在している。田の神信仰とも呼ば

れている。近年では少なくなったが、例えば苗代前の田の一区画に仮神殿を建てて、依代すなわち神を憑依させる藁束を供え豊作を祈願するという風習がある（芳賀・1959）。また正月明けの田に出て木を立て依代として祀るなどの風習もある。その際「田」はただの土場ではなく八百万の神の1つの神聖な場所となるのである。

松前（1988）は古代の「神の観念」の捉え方について次のように述べている。

…古代人は、上は日月星辰、風雨・雷電・雲霧のような、天上の自然現象から、下は山岳、河川、湖沼、海岸、森林、島嶼、などの自然現象、また異常な力を持つ動植物、また人工物としての家屋、船舶、刀剣、鏡、櫛、杖などに至るまで、その内奥ないし背後に、神霊の存在を認め、それをカミと呼んだ。虎、狼、兎、蛇などを神と呼び、桃子をオオカムツミ、頸飾りの玉を御倉板拳神と名づけ、磐根木株草葉がみな言問うたと語られているなど、自然崇拜・アニミズムの信仰の表れである。（p.4）

松前に従えば「田」もまた「稲」も信仰の対象となる。事実として先述した「田の神」を祀るように「田」に対する信仰は伝承されている。また「稲」に対してもそうである。

肥後（1985）は次のように指摘する。

…穀物は直接人間の生命の根本を維持せしめるはたらきをもつものであり、…穀物を代表するものは稲であり米である。日本の古代農業は水稻の栽培を主とした。勿論畑も作り麦や豆や菜の類も植えられたが、主とするのは田であったらしく、後にも観るように田の神を祀ることは多いが畑の神とみるべきものはない。（pp.194-195）

稲もまた信仰の対象であった。ここで考えてみたいのは、このような信仰を持つ農民が、水田作業における自らの「からだ働き」のあり方に齎す影響である。「田」や「稲」が神であったなら畏敬の念を持ち動作やしぐさに大いに影響を与えたことが考えられる。自らも共に存在する生活世界の至る所に八百万の神が宿ってい

るとしたらどうであろう。少なくともそのような関係にあるならば神聖な「田」や「稲」に対して粗暴な振る舞いをしないことは確かである。歩き方にもその場に馴染むように「重力同調性」に裏打ちされた配慮が顕現するのではないか。すなわちその配慮が「すり足」という1つの精神的な表象形態を生成させるとも考えられる。信仰心もまた「すり足」の生成要因の1つと看做し得るのではないだろうか。

かくも水田農耕における立ち働き性文化は、二足ロコモーションの意味論をその特殊なからだ働き性にそくして変容させしめ、精神文化をも特殊に練成させてくれる。

4. ハビトゥスとしての「すり足」の検討

ここに「稲作」について、「田と土」について、「履物」について、「水田と原始信仰の関係」について検討し「すり足」の生成要因を観てきた。ここではそれらの知見を総合的に検討してみたい。「すり足」の生成を促す諸要因はそれらを生成させるに足るある一定の継続的で習慣的な「歴史的経緯」のうちに存在している。すなわちある一定の期間にわたる継続的な「からだ働き」が生成させる身体性の問題が「ハビトゥス」を形成するのであって、その形成は身体的習慣性に起因していると考えられる。

「ハビトゥス」という概念は古くはモースが『社会学と人類学』（1950）で、さらにブルデュー（1980・1990）が社会構造を説く概念として用いている。長谷川などは著書『社会学』（2007）においてハビトゥス理論を次のように要約して普遍化させている。

- ①日々の実践によって繰り返され安定していき、逆にふだんとは異なった行動がなされることで流動化する。
- ②学習されるといふより日常の生育環境のなかで長い時間かけて身についていく。
- ③言葉の使い方、ものの見方や立ち居ふるまいなど、本人の意識的な統御なしに機能する習慣。

長谷川などの文脈にそって本研究の課題である「すり足」の生成問題に注意を寄せてみれば、

ハビトゥス概念とは、この際、日々の水田農耕に励む立ち働き性の「からだ働き」を習慣的に繰り返す生活世界（舞台機構）において、長い歴史的な時間の中で無意識的に身に付けてしまう身体性（すり足）として習慣化された身体的構造過程を説明するものであると考えられる。ブルデューはハビトゥスの概念的な特色について次のような3つの要因を重層的に内包するものであると簡潔に整理して提示している。

- ①身体化された歴史。（1990・p.177）
- ②客観的構造の身体化。（1988・p.88）
- ③実践と表象の産出・組織の原理として機能する素性をもった構造化された構造。（1988・p.83）

人類史をひもといてみよう。狩猟採集労働という走り働き性の二足ロコモーション生活を基層とする399万年間にもわたる「能動的で自律的な生活過程」から、水田農耕という立ち働き性の二足ロコモーション生活を基層とせざるをえない「受動的で他律的な生活過程」への急激なパラダイムシフト。この問題は二足ロコモーション生活者の「ハビトゥス生成」に対してどのような変容を齎したのであろうか。

「走り働き性からだ働き」から「立ち働き性からだ働き」への180度の変化。この原初の「舞台機構」の急激な変容のもとでは、他律的な客観的構造とのかかわりを、すなわちこれまでの検討で観てきた生活文化的な「すり足」の生成要因との「かかわり」のすべてを甘受せざるを得なかった。「すり足」の生成過程はまさに日本の水田農耕という立ち働き性文化が齎した「身体化された歴史」そのものを表象している。本研究では、水田農耕における日々の労働の中で「すり足」という無意識的な身体技法が、長大な時間をかけて生活的客観的構造を身体化させて表象化された経緯を確認できた。また本研究では、「すり足」の生成という特有な立ち働き性文化を齎した水田農耕生活が、原日本人の精神形成にも土着的に影響している経緯をも観ることができた。

「すり足」生成において見逃がすことのできない経緯がある。現代にもよく知られる世阿弥

は若き時分に「田楽」の名手であった。その世阿弥が、晩年に現代能に近い「すり足」などを基本とする「動かない身体」という表現的極致の発見に到達する。往時の田楽は民衆に支持されて飛び上がったりはね返ったりする曲芸のようにアクロバットの動作が主であった。この「動」から「不動」への転換は何を意味しているのであろうか。その経緯を具に松岡心平が『宴の身体―バサラから世阿弥へ―』（1991）で洗い出す。背景には「日本の中世」の時代精神が関与していると松岡は指摘する。実に日本の中世初頭の「踊り念仏」などの身体文化は松岡の読み解くところ『民衆的カーニバル世界』の喧騒的律動に彩られていたのである（同前・pp.1 - 24）。

その風景は先に引用した李御寧の看破した静的な日本舞踊のイメージとも正反対に異なる。なぜなのか。本研究の観るところこの田楽の喧騒的律動は弥生時代に順化させられた立ち働き性文化の定常円環運動性を特徴とする日常的な「一定場所における変化の乏しい淡々とした長時間にわたる水田農耕」への反動が願望的に齎したものでなかったか。反動の背景にはそれまでの399万年間にわたる原文化（走り働き性文化）の培ってきた「潜在心性」が無意識的に作用していないのか。その反動を発条として民衆に受容された「田楽」を経由して日本文化としての身体表現様式がやがて世阿弥が創出するように静的で不動のようにも見える「能」へと昇華していく。この経緯にも「精神的反動」としての契機がなければならない。しかしこの経緯については本研究の課題としておく。

鈴木『禅と日本文化』（1938）の示唆するところ「仏教を離れて日本文化を語ることはできない」（p.149）。この際、仏教とは「禅」のことである。世阿弥もまた禅の影響を受けている。本研究者の修行している武術もまた古くは禅の身体性に学んでいる。身をもって悟る禅修行はいわゆる不動性の身体文化である。この不動性は日本の水田農耕が開化させた立ち働き性文化にも通底している。

さて本研究で観てきたように、水田農耕が生

成させしめた「ハビトゥス」としての「すり足」における生活的精神性が、重力同調性の立ち働き性文化のもとに意味論的変容を昇華させて、例えば禅思想の齎したと考えられる「時代精神」とも融和するとき、日本文化といわれる独特が創出されたのではなからうか。この発問もまた向後への研究課題である。

VI 結論

本研究では「すり足」の生成問題を考察してきて下記の5点にわたる研究成果を得た。

- (1) 伴の「二足ロコモーションの意味論」の視点を借りることで、「すり足」は、「立ち働き性文化」における「からだ働き」の重要な側面を分担していることが判明した。また水田農耕によって生成された「すり足」を内包する身体文化は、「重力同調性」の「からだ働き」に裏打ちされて「主客未分型共生原理」の思想を育むことが意味論的に観てとれた。
- (2) 武智の「すり足観」を検討することで日本の水田農耕文化の特異性に着目することができた。また蘆原「すり足観」からは「すり足」の生成に関わる諸要因すなわち感覚や意識や習慣や労働形態などが相関的に働いているという着眼点を得ることができた。
- (3) 田や土や田下駄や原始信仰という舞台機構のすべてが水田農耕文化の土台になっていることを確認した。また「すり足」と「ナンバ動作」の始原的相関性も確認しえた。これらの土台のもとに精神性や信仰心などが培われ「主客未分型共生原理」の思想性が立ち働き性文化の基調になっていることを確認した。
- (4) ハビトゥス概念を用いて「すり足」の生成構造が水田農耕における「からだ働き」に由来することを社会科学的に検証できた。水田農耕という舞台機構は1つの客観的構造であって、「すり足」は、その構造内生活において歴史的に身体化されたことを確認できた。
- (5) 課題：狩猟文化を根源とする原文化としての「走り働き性文化」は「重力打破性」の問題を根幹として「主客対立型競争原理」を生活思想へと定着させた。その思想性を超越

論的に発展させた近代科学主義は様々な問題を山積させている。ここに現代の課題がある。伴（2009）の示唆するところこの課題を打開するためには「立ち働き性文化」と「走り働き性文化」の思想的対話が求められている。

VII おわりに

武智や蘆原らの先行研究に後押しされて「すり足」の生成経緯が水田農耕に由来することを本研究の目的にそって一応のことに論証できたと考えている。結果として本研究をとおして我々の祖先が暮らしてきた昔日の日常生活へ思いを馳せることができ個人的には大いに意義があることであった。

ところで「ハビトゥス」はここで終わることはない。まさに身体化された「からだ働き性」は、次のステップとして「新たなハビトゥス」もしくは「客観的構造の変化」にも影響を与えることになる。それは、例えば世阿弥に端を発する「能」が前時代からのハビトゥスを深層で受け継いで能舞台という舞台機構を作り、根源的な水田農耕による意味構造を形成させしめた原初的な「すり足」文化を、さらに日本文化の神髄ともいえる身体表現文化へと昇華させる背景の1つになったように、である。

本研究をとおして、「すり足」の文化的身体技法の変容と意味構造について考察でき、さらに多くの課題を展望することができ、また他国の稲作文化にも関心を持つことができた。本研究者はこの「考察」と「展望」と「関心」をより深めることを今後の課題としたいと考えている。

最後に本研究のご指導をして頂いた、関西大学大学院文学研究科身体文化専修の指導教授である伴義孝先生へ衷心からの感謝の意を表したい。

【参考文献】

蘆原英了 舞踊と身体 新宿書房 1986
伴義孝 二足ロコモーションの意味論 関西大学出版部 2000
伴義孝 身体文化学試論 身体運動文化学会関西支部編『身体運動文化論攷』第8号（2009）

pp.1-404
ブルデュー（原典1980） 今村仁司／港道隆訳 実践感覚 みすず書房1988
ブルデュー（原典1990） 加藤晴久訳 超領域の人間学 『現代思想』（3月号）所載対談 藤原書店1990
芳賀日出男 田の神 平凡社 1959
長谷川公一／浜日出夫／藤村正之／町村敬志 社会学 有斐閣 2007
肥後和男 原始信仰の研究 教育出版 1985
藤原彰夫 土と日本古代文化 博友社 1991
小林青樹 縄文から弥生への転換 小林青樹・広瀬和雄編『弥生時代はどう変わるか』所収 学生社 2007
木寺英史（2004）本当のナンバ常足 スキージャーナル
金関恕 弥生時代の集落 学生社 2001
李御寧「縮み」志向の日本人 1982 講談社学術文庫2007
モース（原典1950） 有地亨／伊藤昌司／山口俊夫訳 社会学と人類学 弘文堂 1973
松前健 神々の誕生序説（『古代信仰と神話文学』所収）弘文堂 1988
松岡心平（原典1991）宴の身体—バサラから世阿弥へ— 岩波現代文庫2004
三浦雅士 身体の零度 講談社 1994
宮本一夫 農耕の起源を探る 吉川弘文館 2009
中橋孝博 日本人の起源 講談社 2005
野村雅一／市川雅 技術としての身体 大修館書店 1999
佐々木高明 日本文化の原像を求めて：日本農耕文化の源流 日本放送出版協会 1983
鈴木大拙（英語版1938）北川桃雄訳 禅と日本文化 岩波新書 1972
武智鉄二 舞踊の芸 東京書籍 1985
武光誠／山岸良二 古代日本の稲作 雄山閣 1994
都出比呂志 日本農耕社会の成立過程 1989
潮田鉄雄 はきもの 法政大学出版局 1973
渡部景隆／恩藤知典 日本の自然 朝倉書店 1977